

勢いのある鳥取の体育

～ はずむ心 豊かな学び 確かな力 ～

鳥取県小学校体育研究会研究部長

鳥取市立瑞穂小学校 横田 博昭

1 体育科の目標構造について

【体育科の究極的な目標】

楽しく明るい生活を営む態度を育てる

【具体的な目標】

①運動に親しむ資質と
能力の基礎を育てる

③体力の
向上

②健康の
保持増進

①は、生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくためには、小学校段階において、その基礎を確実に育成することが重要であることを強調したものである。その資質や能力とは、次のとおりである。

- 運動への関心や自ら運動をする意欲
- 仲間と仲よく運動すること
- 各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力
- 運動の技能

これらの資質や能力を育てるためには、児童の能力・適性、興味・関心に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要である。このことにより、生涯を通じて運動を日常生活の中に積極的に取り入れ、生活の重要な一部とすることを目指している。

②は、身近な生活における健康・安全に関する内容を実践的に理解することを通して、自らの生活行動や身近な生活環境における学習課題を把握し、改善することができる資質や能力の基礎を培うことを示したものである。

③は、各種の運動を適切に行うことによって活力ある生活を支え、たくましく生きるための体力の向上を図るということである。そのためには、発達の段階に応じて高める体力の内容を重点化し、自己の体力や体の状態に応じた高め方を学ぶことはもとより、学習したことを家庭などで生かすなど、体力の向上を図るための実践力を身につけるこ

とができるようにすることが必要である。

2 勢いのある体育学習を実現するために

(1) 勢いのある体育学習

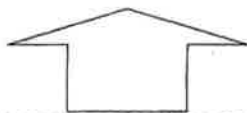
本県のめざす「勢いのある体育学習」は、次のような体育学習と考える。

- 児童が生き生きと目を輝かせて、自発的、自主的に課題に取り組んでいる体育学習。
- 学習内容が明確で、系統性を踏まえた指導により、基礎的な技能や知識を習得し、習得した技能や知識を活用している体育学習。また、新たな課題を解決するために、積極的にチャレンジ（探究）する体育学習。
- 充実した言語活動を行いながら仲間と豊かにかかわるなかで、運動の楽しさや喜びをしっかりと味わい、拍手や歓声があがる体育学習。
- マネジメント場面（準備や片付けなど）や、インストラクション場面（説明や演示、指示）が効果的に設定され、運動量が確保されている体育学習。

そこで、児童が生き生きと目を輝かせて、自発的、自主的に活動する「勢いのある体育」とするために、「基礎的条件」と「内容的条件」があることを踏まえて指導するようにしたい。この2つの条件は相互に深く関連し、実際には相乗的に授業成果にプラスに、あるいはマイナスに作用する。例えば、いかに周到にマネジメントを行い、肯定的な雰囲気づくりに努力を払ったとしても、学習内容がつまらないものであったり、教材や場づくりが適切でなかったりすれば、児童の学習意欲は高まらず、学習活動は停滞してしまう。逆にいかに理想的な授業づくりの理論を掲げ、授業計画を立てたとしても、授業の基礎的条件が整っていなければ、その理論や計画は児童の学習活動に現実化されない。

よい体育授業の内容的条件

- ・ 明確な学習目標（学習内容の明確化）
- ・ 教材，教具，場づくりの工夫
- ・ 多様な学習方法
- ・ 教師の指導性
- ・ 的確な評価
- ・ ICTの活用 など



よい体育授業の基礎的条件

- ・ 運動の学習時間（運動量）の確保
- ・ 学習規律の確立
- ・ 指導者の肯定的な働きかけ
- ・ よい人間関係 など

※ 「内容的条件」は「基礎的条件」の上に機能する。

(2) よい体育授業とは

以下のようなよい体育授業の姿を共有し、授業づくりに生かしていきたい。

1 「体育授業の方法」 高田典衛著 1976年 杏林新書より

○ よい授業の姿

①運動の快適さ ～精一杯運動させてくれる授業～

適切な運動量・事故の防止・爽やかな規律

②技能伸長の認知 ～ワザや力を伸ばしてくれる授業～

生徒の伸びを教師が認めること・一人一人の生徒の記録・伸びることの喜び
合理的な運動の練習法・効果的な施設用具の活用法

③仲間との明るい交友 ～仲間と仲よく（学習）させてくれる授業～

体育特有の欲求・教材に合った上手な組み分け・賞罰の仕方
人間関係の適切な処理

④知的探求心の満足 ～新しい発見をさせてくれる授業～

学習形態の駆使、発問法、解説法、示範法、教具や教材の活用法など、授業の指導技術の工夫

2 「すぐれた体育授業を観る 解説」 平成19年 高橋健夫

○ すぐれた体育授業の姿

「学習目標が十分に達成され、学習成果のあがっている授業」

○学習に勢いがある 「学習の淀みがなく、テンポよく学習が進行している様子」

①学習場面に多くの時間が配当されている。運動学習場面の時間が潤沢。

②マネジメント場面（移動、待機、用具の準備、後片付け等）やインストラクション場面（教師による説明・演示・指示）の時間量や頻度が少ない。

③運動学習場面での学習従事の割合が高い。

④学習場面でのオフタスク行動が少ない。

⑤成功裡な学習従事（ALT-PE）の頻度が高く、逆に「大きな失敗や困難」を経験している者の割合は低い。

○学習の雰囲気がいよい

①集団での協同的活動、集団的思考、賞賛、助言、励まし、補助等の肯定的な人間関係行動の頻度が高く、否定的な人間関係行動はほとんど生じない。

②学習活動に関わって、笑い、拍手、ガッツポーズ、ハイタッチ等の個人的・集団的な肯定的情意行動が頻繁にみられる。

学習場面に多くの時間が配当されていて、その場面で子どもたちが積極的に学習に従事しており、しかも仲間同士が助け合ったり教え合ったりして、楽しく明るい雰囲気を醸し出している授業。

3 研究の視点

(1) 学習内容の明確化

学習内容は体育学習の中で「身に付けさせたいもの」と考えることができる。例えば、サッカーの学習で身に付けさせたい力は、サッカーならではの楽しさや技能、サッカーをすることによって身につけられる体力や運動能力、ルールや練習を工夫する思考力・判断力などである。一般的には、サッカーならではの楽しさを「機能的特性」、サッカーの技能やルール、知識を「構造的特性」、体力や運動能力を「効果的特性」という。それらの運動の特性を明らかにし、毎時間身に付けさせたいものが明確になることで、運動の楽しさを味わい、基礎的な技能や知識も身に付くものとする。教師は、単元を通して身に付けさせたいものを明確にするとともに、その学習内容を単元のどの時間にどのように指導するのかについても明確にして指導しなければならない。

保健学習においても、学習内容の重点を把握し、指導する内容を明確にする必要がある。そのためには、現行の学習指導要領の解説書にある理解すべき学習内容を児童自らが主体的に学び取ることが重要であり、教え込みの盛りだくさんの学習から脱却し、焦点化された学びを実現させることが必要である。「あれもこれも」ではなく「これをこそを」という授業づくりを目指したい。

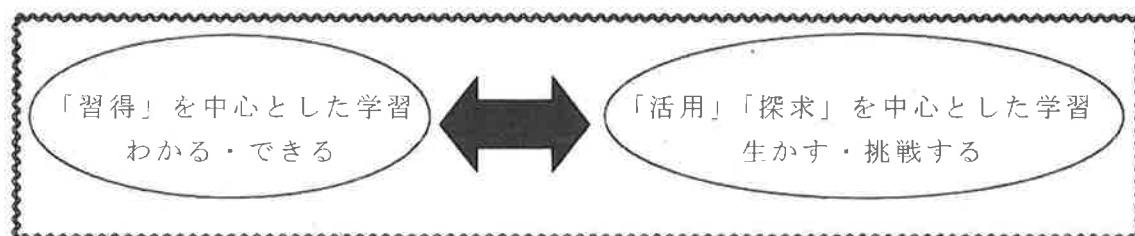
単元の流れ及び評価の計画例（マット運動）

	1	2	3	4	5	6 (本時)	7
主な ねらい	準備や片付けの仕方と基本的な回転技や倒立技を知ろう。	基本的な回転技と倒立技のこつを学ぼう。	基本的な回転技と倒立技を練習しよう。	発展技にもチャレンジしよう。	自分に合った回転技と倒立技を選んで組み合わせよう。	組み合わせた連続技を練習しよう。	練習した連続技を発表しよう。
検となる 学習内容	・準備や片付け ・基本的な回転技と倒立技	・基本的な回転技のこつと倒立技のこつ	・練習の仕方 ・補助の仕方と教え合い	・発展技 (コンバート・頭はね跳びなど)	・技の選択 ・つなぎ技	・連続技の練習	・連続技の発表
学習活動【わかる・できる・チャレンジする】	用具の準備・感覚づくりの運動・本時の学習の確認						
	・オリエンテーション	回転技の練習に取り組む。 			・発展技	自分に合った回転技と倒立技を組み合わせ、 連続技の練習に取り組む。 	
	・感覚づくりの運動 ゆりかご かわるの足行ろ 寝返せ 川渡り など	倒立技の練習に取り組む。 					
	・基本的な回転技 前転 後転 開脚前転 開脚後転 とび前転 など						
	・基本的な倒立技 側方倒立回転 倒立 など				・技の選択、組み合わせ ・足交差・回転ジャンプ	・連続技の練習	・練習、教え合い ・連続技の発表 ・アドバイス
	用具の片付け・学習の振り返り・次時の学習について						

(2) 学習過程の工夫

現行の学習指導要領では、基礎・基本を確実に習得する学習と、これをベースに活用・探究する学習とをバランスよく組み合わせていくことを推奨している。これからの体育学習において、教師はこれらの力を、対立するものではなく、両輪の（緊密な）関係にあるものとしてとらえ、周到に学習過程を組んでいく必要がある。つまり、単元内あるいは単位時間内で、いつその運動の基礎・基本をしっかりと身に付けさせ、いつそれらの力を活用して課題解決に臨ませるのか、いつ新たな課題にチャレンジ（探究）していく活動に臨ませるのか、といった点について、これまで以上に意図的・計画的に学習過程を仕組んでいく必要がある。

保健学習については、関心や意欲を高める学習過程の工夫が求められる。学習方法の工夫としては、工夫された発問や課題提示、グループワーク、討論やディベート、ブレインストーミングなどが挙げられる。しかし、学習内容や目標より学習方法が先にありきになってはならない。このことを踏まえ、児童自らが疑問や好奇心を持った質問したりして知識を「習得」したり、さらには習得した知識を「活用」したり、自ら進んで調べるなど「探究」したりする児童の姿が見て取れるような学習方法を開発していくことが求められている。



(3) 効果的な指導

児童の体力向上や確かな技能・知識を身に付けさせていく上で、教師の指導の在り方は欠かせない要素である。ところが、これまでの体育学習では、ともすれば児童の主体性を重視するあまり児童自身が適切な学習方法を選べていなかったり、教師の指導性が消極的になったりして、結果的に基礎的な技能がなかなか定着しない傾向があったと言われている。そこで我々は、これまで以上に児童に生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎となる「確かな力」が身に付くよう、より一層指導の充実を図らなければならない。そこで、教師の指導の在り方の改善の視点として、鳥取県では以下のような視点を重点項目として課題改善に向けたアプローチとする。

- | | |
|---------------|--------------|
| ◆場の設定の工夫 | ◆教具の開発・工夫 |
| ◆教師の指導言の吟味・検討 | ◆ミニゲームの開発・活用 |
| ◆ICTの活用 | |

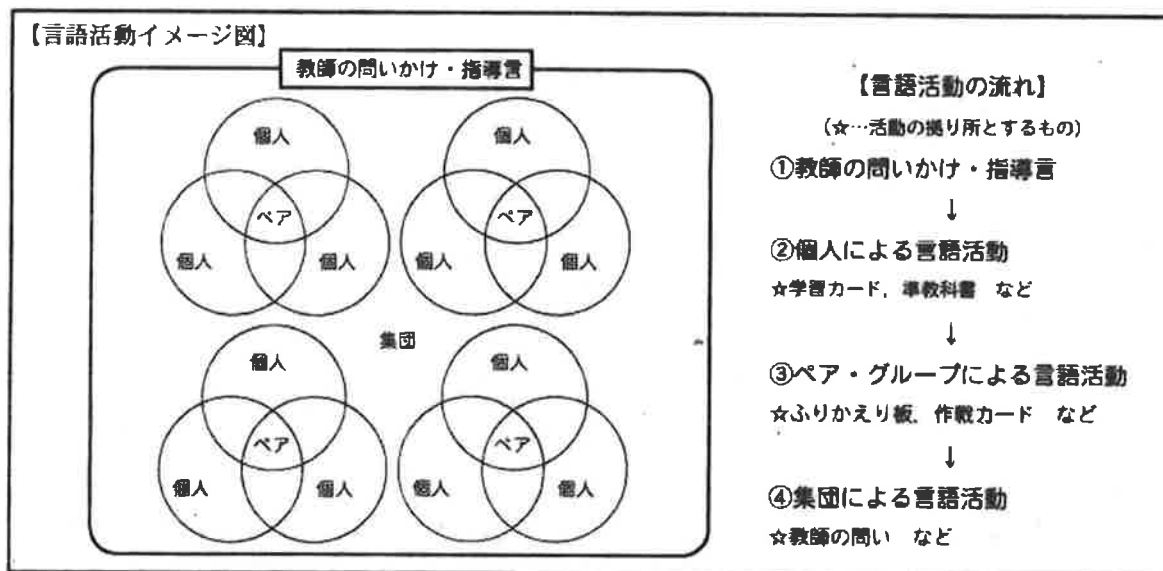
(4) 言語活動の充実

現行の学習指導要領では、体育科においても言語活動の充実が課題とされた。そのための一つの手立てとして、例えば「教師の問いかけ」が挙げられる。つまり、教師が計画的に準備した問いかけによって、児童が運動学習や運動観察等の探究学習を行う過程で、児童の言語的表現を引き出そうという試みである。

一方、そのような課題意識を持った児童相互の「見合い・教え合い」の促進も、思

考活動や言語活動を活性化する上で有効である。もちろん、その前段として児童一人一人がしっかりとした考え、動きや作戦、様相を見ることができるとも大切である。従って、そのような視点を持てるような教師の指導も必要となってくる。学習カードやふりかえりボードなどによって自分の活動や友だちの活動を振り返り（個人による言語活動）、仲間同士によるフィードバック行動（グループによる言語活動）を行えるような場を意図的に設定していくことが重要であると考え。

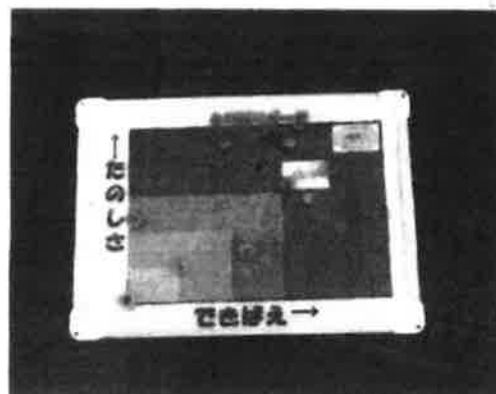
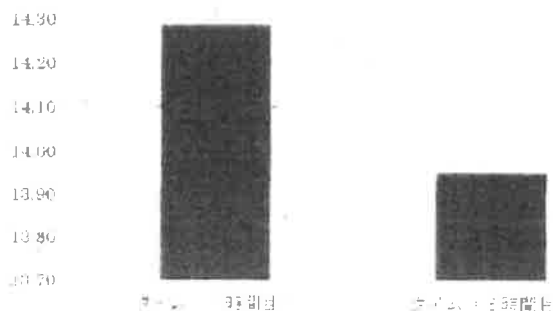
なお、これらのことについては保健学習においても同様のことが言えると考え。



(5) 形成的授業評価やデータを活かした授業改善

学習者である児童に活動を評価させることによって学習を見直したり、より効果的な学習のあり方を求めていったりすることは大変有効である。例えば、毎時間アンケートを児童に対して行い、自らの授業に対する評価を行うとともに、得られたデータを分析して次時や次の単元の授業改善に役立てるというものである。ただし、ここで得られたデータは客観的なデータの一つとして扱い、タイムや記録をとって毎時間の伸びを見たり、児童の学習の様子やワークシートを分析したりすることと合わせて授業の評価や改善を行うことが大切である。

80m加速走の平均記録



4 研究構想図

